

● 農福連携「ケア（介護）＋ファーム（農場）」について

団員 本田 精志

1月12日（火）から1月18日（月）の7日間、姉妹都市であるドイツのフライブルク市を含む、ドイツ・デンマーク・オランダの3カ国に海外都市行政視察団の一員として参加。市議となり初めての海外視察であり、事前勉強会や担当テーマに関する資料を準備して、期待と不安の中、視察に臨んだ。

今回の視察において、私は障がい福祉を担当し、その中でも最近、我が国でも耳にするようになった農福連携、福祉先進国であるオランダのケアファームについて視察報告を行う。

視察先は、オランダ・アムステルダム の東南東約6.5kmの地点にあるバルネフェルドのパラダイスファームという農園である。経営者のご主人のアイスブランドさんと奥さんのカロリンさん。2002年に農業経営希望のご主人と介護や教育活動に興味があった奥さんが、高齢で農業が続けられなくなった方より農園を買い取り、2006年にケアファームを開業した。



（カロリンさんによるレクチャー）

ケアファームとは、「ケア（介護）」＋「ファーム（農場）」で、認知症、精神疾患のある方、発達障がいのある子どもたちなどにデイサービスを提供している農場（福祉農園）のことである。緑豊かな環境の中で共に過ごし、時には収穫や清掃など軽い農作業や家畜などの動物に触れ合うことにより、ストレスの緩和や症状の

進行を遅らせるケアにつながるとして、1998年にはオランダ国内に75カ所だったケアファームが、2015年には1,400カ所となっている。主な収入源としては、オランダの介護保険 AWBZ からの介護報酬、各種の寄付、農産物などの販売代金の3つで、その運営はプロのスタッフとボランティアや研修生が担っている。AWBZ とは、日本の公的介護保険にあたり、自治体が保険者



(卵の出荷作業所)

となりすべての人が加入する。日本では、家族が介護を行った場合に給付はないが、オランダでは、家族や友人、地域の方が介護を行っても給付が受けられる。社会的企業としてケアファーム経営が認められれば、農業経営による利益のほか、国からの助成等の特典が与えられることも増加する一因となっているようである。

ケアファームで実施するサービスは、経営者の関心や興味、また飼育する動物や栽培する野菜・果物によっても内容が異なるなど、多種多様となっている。

視察したパラダイスファームでは、約6,000羽の鶏、約80頭の豚、約10頭の牛や馬を飼育し、野菜、果物、ハーブなどの有機野菜栽培を行っており、ケアを必要とする人を約120名受け入れているが、利用希望の問い合わせも多く、全ての人を受け入れることは困難であるため、経営者が面接をして受け入れるかどうかを決定しているとのことであった。

平日の月曜日から金曜日の昼間は認知症や後天性障がいの方が利用しており、施設を訪れた週末は発達障がいなどの子どもたちが宿泊で利用していた。スタッフは、介護や農業などの専門者が約20名、研修生やボランティアが約60名、敷地総面積は約17.5ヘクタール、周囲が森に囲まれ恵まれた環境の中に位置していた。

収入のうち、農産物販売では年間200万個の卵を販売しているが、地域とのつながりを考えて、卵200万個のうち60%に当たる120万個は地元の小売店20店舗で販売している。また、農園を知ってもらうために1年に1回オープンデイを設け、地域の方に農園の開放等を行っている。



(施設内の野菜等販売処にて)

アイスブランドさんのお話で驚いたのは、ここでケアを受けている人は、農作業の対価としての賃金はないことであった。日本でも最近、農福連携の取り組みが進められているが、オランダのケアファーム事業とは大きな違いがあると感じた。日本では、障がい者の働く場所づくりやその賃金収入による生活力向上などを目指した取り組みとなっているが、オランダの場合は、農家は収入確保のための多角的経営の一つとして、また一方、利用者は自身のケアを主目的にケアファームを利用しているように思えた。

国の制度に違いもあり、オランダタイプのケアファームを松山で取り組むことは非常に難しいと思うが、今後、高齢人口が増加することが予測されており、その中でも認知症対応は待ったなしの状況となってくる。今回の視察経験を活かし、



(アイスブランドさんから説明を受ける視察団)

し、高齢者や障がいを持った人が住み慣れた自宅や地域で生活を継続できるよう、現行のサービスの中でより効果的な取り組み、いわゆる松山式農福連携の推進を目指していきたい。